

令和元年度第3専門技術群（物質・材料系）専門研修報告書

藤橋 明子、坂田 文恵、塩田 憲司、下野 智史、宮嶋 直樹

令和元年度第3専門技術群世話人会

1. 研修目的

本研修では、近年重要性が高まっている知的財産に関する事項について、京都大学内外の講師による講義・講演、分析機器メーカーへの見学と講義を通じて知識を深め、技術職員としての対応を考えることを目的とした。また、知財対応という共通の観点から技術支援の在り方を考えることを通じて、技術職員同士の職務に対する相互理解および交流を図ることも目的とした。

2. 開催日

令和元年9月26日(木)

3. 開催場所

午前： 京都大学吉田キャンパス 吉田南2号館 1F 理系総合実習室

午後： 株式会社ジェイ・サイエンス・ラボ

4. 参加者

17名。参加者は表1の通り。

5. プログラム

8:45 ～ 受付	
9:05 ～ 9:15	開会 全体の説明等
9:15 ～ 10:25	講義1：「研究を進めるうえで知っておきたい知的財産の基本と実際」 講師：弁理士 廣瀬隆行 氏（廣瀬国際特許事務所）
10:25 ～ 10:40	（休憩）
10:40 ～ 11:50	講義2：「大学の研究・教育活動と知的財産」 講師：京都大学産官学連携本部 知的財産部門職員 藤森賢也 氏
11:50 ～ 12:00	午後の部の説明と集合場所等の連絡
12:00 ～ 13:00	（昼休憩）
13:00 ～ 17:15	株式会社ジェイ・サイエンス・ラボ 見学（貸切バスによる移動含む）
17:15	帰学・解散

6. 研修の概要

午前中に知財・特許に関する講義、午後からは装置メーカーのラボラトリー見学の構成で行った。午前の部の講義は大学の外側と内側の視点から知財・特許についての解説を聞くことを意図して、外部から招聘した弁理士による講義と本学産官学連携本部 知的財産部門職員による講義により構成した。

廣瀬隆行弁理士による『研究を進めるうえで知っておきたい知的財産の基本と実際』と題した講義では、研究と特許の微妙な関係や経済界・産業界において知財がどのように扱われるのかについて、実例をもとにした解説を聞くことができた。特許に関連して動く金額のスケールの大きさに圧倒されつつも、知財の扱いの重要性を認識することができた。大学が関係する具体的な場面として、ラボノート管理の重要性、（産学共同研究などで）論文投稿や学会発表の際にどこまでを公表するのか関係者で確認し書面で内容を残すことの大切さ、営業機密保持の重要性についても学ぶことができた。参加者からは「ラボノートの取り方や営業秘

密の話など、学生や研究者と日常的に関わる立場で仕事をする者として勉強になった」「記録に残すことの重要性やその方法を学ぶことができた」といった感想があった。

本学産官学連携本部 知的財産部門の藤森賢也氏には『大学の研究・教育活動と知的財産』と題して京都大学における知財の取り扱いや特許申請のサポート体制などについて解説していただいた。特許申請時に研究者の負担を減らすようにサポート体制が設計されていることや、現実的には特許のライセンス収入よりも外部資金獲得の観点で知財活用が非常に重要といった点について詳細な解説を聞くことができた。また「院生発表会などは参加者全員が機密保持の誓約書にサインすることにより非公開の扱いとなっている」といったことも改めて確認することができた。受講者からは「大学の現状や学内手続きについての詳しい解説は今後の業務に役立つ可能性が高く、興味深かった」「技術系の職員だけでなく、研究サポート関連の事務系職員にも知っておくべきと感じた」といった感想が寄せられた。



写真1 廣瀬弁理士による講義



写真2 藤森賢也氏による講義

午後は株式会社ジェイ・サイエンス・ラボのラボラトリーを見学した。最初にデータインテグリティおよびFDA 21 CFR Part 11 や装置精度の維持・管理についての解説を聞いたあと、装置がどのように設計・製造されているのか実際にラボラトリーで見学した。医薬品等の製造現場などではデータインテグリティの証明が非常に重視されるため、医薬分野で使われることが多い分析機器にはこれらへの対応を意識して設計・製造されるものも多い。すべての操作記録を残し余計な操作・改変はしていないと証明しようとするとういった設計になるのか、精度を確実に保つためにメーカー側がどのような対応をとっているのか・・・といった点について解説していただいた。データの改ざん・捏造は絶対に許されないという倫理観は大学の研究現場において当然の大原則であるが、Part 11 のような電子記録や電子署名に対し信頼性を確保するための規程の名前自体を直接聞くことはあまりない。受講者からは「実験・研究で使用する分析装置や機器の維持管理を行う上で、知っておくべき考え方を学ぶ事ができた」、「現在の分析業界が置かれた状況を理解するきっかけとなり有意義だった」、「メーカーも対応に苦慮している点を理解することができた」「(実験的な条件での使用が多い) 装置ユーザーとしては規制外の使い方での使い勝手を重視したソフト開発もお願いしたい」といった感想が寄せられた。



写真3 見学の様子1

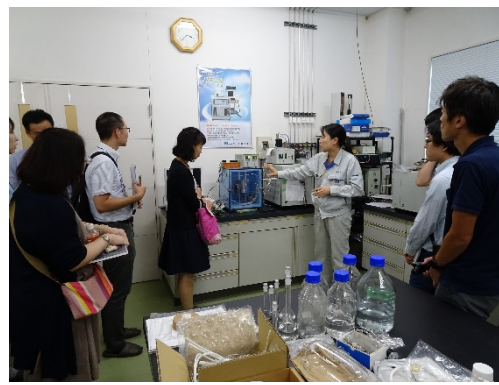


写真4 見学の様子2



写真5 見学の様子3



写真6 集合写真

7. まとめ

本研修では日頃気になりつつも勉強する機会の少ない「知財」関連の諸々について、専門家の方々からまとまった解説を聞きくことができた。また、データインテグリティへの対応で最近の分析装置がどのように設計される傾向があるのかを知ることができた。研修後のアンケート結果によれば、講義・見学とも参加者からは概ね好評であった。参加者各々が自分の業務において研究者への対応やデータ類の取り扱い方、装置の運用・分析記録の残し方などを考える際、今回の内容を役立ててもらえるのではないと思う。

最後に、今回の研修でご講義いただきました講師の皆様、見学を快く受け入れてくださった株式会社ジェイ・サイエンス・ラボの皆様、また、準備・運営にご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

表1 受講者リスト

所属	氏名	所属専門技術群
人間・環境学研究科	下野 智史	第3 専門技術群
人間・環境学研究科	酒井 尚子	第3 専門技術群
人間・環境学研究科	吉田 あゆみ	第3 専門技術群
薬学研究科	坂田 文恵	第3 専門技術群
農学研究科	吉岡 哲平	第3 専門技術群
化学研究所	藤橋 明子	第3 専門技術群
化学研究所	平野 敏子	第3 専門技術群
化学研究所	大嶺 恭子	第3 専門技術群
工学研究科	丸岡 恵理	第3 専門技術群
工学研究科	宇野 優衣	第3 専門技術群
工学研究科	佐々木 宣治	第3 専門技術群
工学研究科	中池 由美	第3 専門技術群
工学研究科	植田 義人	第3 専門技術群
工学研究科	塩田 憲司	第3 専門技術群
工学研究科 附属環境安全衛生センター	日名田 良一	第3 専門技術群
工学研究科 附属環境安全衛生センター	宮嶋 直樹	第3 専門技術群
工学研究科 附属桂インテックセンター	西崎 修司	第1 専門技術群